J-30

# リトル・ブラジル
## 多文化共生社会の実現に向けて
## Little Brazil
## Towards the realization of a multicultural society

佐藤信治[1]，　○斉藤亮介[2]
Shingi Sato [1] , *Ryosuke Saito [2]

There is a town of Oizumi-machi, which is referred to as "Little Brazil" in my hometown in Gunma Prefecture. This town is the town with the highest density among foreigners in Japan. Suffer from a labor shortage serious, but moved to the acceptance of Japanese Brazilians actively, with the increasing problem of immigration = settlement of Japanese Brazilians has gone generated as a result. Also, in Japan today are serious aging problems, may cause a decrease in the labor force due to population decline in the future. It is expected there, and actively accept immigrants. I considered multicultural society is to progress to more than now. Therefore, we will focus on proposals for Oizumi-machi, Gunma Prefecture, Japan's most densely foreigners and multicultural society can live in this graduation design.

### １．はじめに

私の故郷の群馬県には“リトル・ブラジル”と呼ばれている大泉町という町がある. この町は, 日本の中でも外国人密度が最も高い町である. 深刻な労働力不足に見舞われ，積極的に日系ブラジル人の受け入れに動いたが，その結果日系ブラジル人の定住＝移民化に伴う問題が発生してしまった. また, 今日の日本では深刻な少子高齢化問題を抱えており, 今後の人口減少に伴い労働力の減少を招く恐れがある. そこで, 移民を積極的に受け入れると予想される. そして今以上に多文化社会は進行すると考えられる. そこで, 本卒業設計では日本で一番外国人密度の高い群馬県大泉町に着目し, 多文化が共生できる社会を実現するための提案をする.

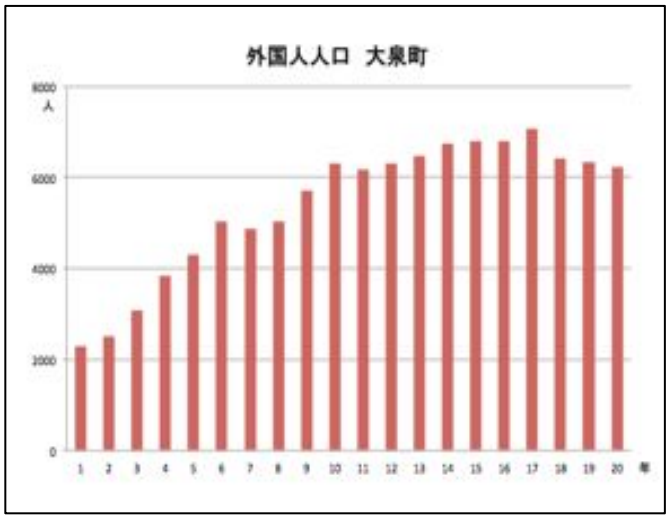


Figure 1. Foreign population-Oizumi-machi

### ２．敷地選定

敷地は日本で最も外国人比率が高い外国人集住都市となっている群馬県邑楽郡大泉町のすぐ西側に位置する刀水橋とする. 大泉町の中でも西側は特に外国人が多く居住している地域であり, その延長に刀水橋は位置する. 1971 年の建設から今年で約 40 年経っており, もうじき補修が必要とされる橋梁である.

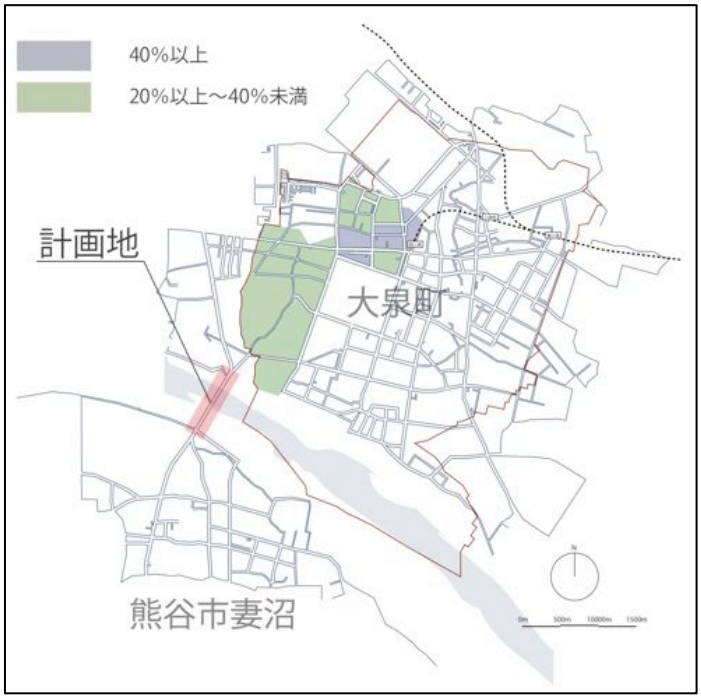


Figure 2. Site

１：日大理工・専任講師・海建 Department of Oceanic Architecture & Engineering , CST. , Nihon-U.
２：日大理工・学部・海建 Department of Oceanic Architecture & Engineering , CST. , Nihon-U.

## ３．　計画背景

### 3-1 外国籍住民

日系ブラジル人を中心とした外国人の子供たちの中には，日本語ができないために就学できなかったり，非行に走るケースも出ている. また, 大泉町における外国人による犯罪件数も増加傾向にあるという.

### 3-2 ディスコミュニケーショ

日系ブラジル人を当初は「出稼ぎ」労働力として受け容れた大泉町だが, その後の定住化に伴う問題に対処していくためには, 一地方自治体の立場だけでは明らかに限界が生じているといえる. 移民を受け入れている他国の状況と同様に, 大泉町でも日本人住民との融合, コミュニケーションのあり方が問題になっている. もともと, 出稼ぎを前提としているために, 居住地区なども別々であり, 日系ブラジル人と日本人住民が交流する場が少ない. 職場でも彼らは深夜労働など日本人が嫌うキツイ現場に投入されてきたので, 結果的に, 日本人の工員とほとんど顔を合わすことが無いのだという.

### 3-3. 移民の受け入れ

人口の減少と高齢化の急速な進展により日本は移民を受け入れる必要が出てくると言われている. 国立社会保障･人口問題研究所の推計によると, 2055 年の総人口は 8993 万人となり, 今より 3 割減少する. しかも, 15～64 歳の生産年齢人口は, さらに減少率が大きく, 現在のほぼ半分になるという. こうした人口構造の変化によって, 消費が減退して経済活動が停滞すること. そして, 高齢化の進展によって年金制度や医療保険制度の運営が困難になることが懸念される. そうした問題を解決するために, 若い外国人を積極的に日本に招き入れなければならない時代は必ずやってくる.

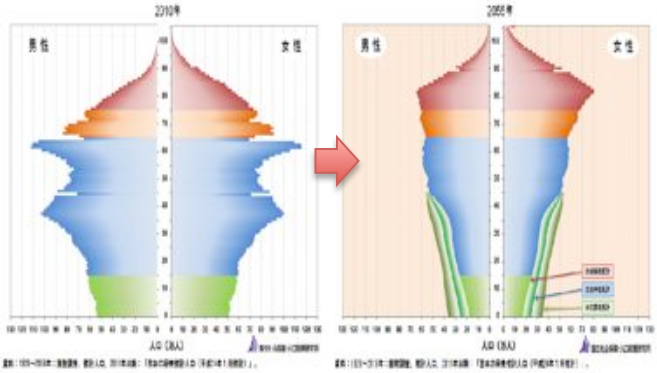


Figure 3. Population Projections of Japan

## ４．　橋の可能性

日本は道を中心に発達した文化と言われている．道に沿って人家ができ集村をなし，発展していった．主街道沿いには店が軒を連ね，多くの人でにぎわいを見せ，そして行き合った人々が立ち話をする．道は，生活ばかりではなく商業スペースであり情報交換の場でもあった．このように人々のコミュニティは道に沿って形成されてきた.

また，橋は川によって分断された町と町とをつなぐ重要な“道”であり，多くの人々が行き交う重要な交通インフラとして存在する．町と町とをつなぐ，それは人と人とをつなぐことにもなりえ，コミュニティの場としても利用できるのではないか．そこで，大泉町周辺で最も交通量の多い道，つまり刀水橋にリビング・ブリッジを計画し，外国人と日本人のコミュニティの場を提案する.

## ５．　基本計画

以上のことをふまえ私は，外国籍住民と群馬県民との共存を考えた，コミュニケーションを誘発するような建築を計画すると同時に，高齢化する橋梁にリノベーションを施し，リビングブリッジ（居住橋）を計画し，多文化共生社会を実現させる.

## ６．　機能

これまでの橋梁は，川の片側から片側へ結ぶのみの初歩的な歩道橋としての役割しか担わなかったが，コミュニティセンター，店舗，レストラン，公園，などの機能をもたせる．これにより，橋自体が人々の訪れる目的地となり，外国籍住民とのコミュニケーションを誘発させるリビング・ブリッジとなる.

Figure 4.To-sui Bridge

## ７．　参考文献

[1] 中山繁信著：「現代に生きる境内空間の再発見」, 2000 年 3 月 10 日　第 1 版　発行

[2] ピーター･マレー／マリアン･スティーブンス：「リビング･ブリッジ／居住橋−ひと住まい､集う都市の橋」, 1999 年 1 月 1 日　第 1 版　発行.

[3]上毛新聞社編：「サンバの町から−外国人と共に生きる群馬・大泉」, 1997 年 3 月　第 1 版　発行.